

地域一体型栄養サポートチームによる在宅高齢者の食支援拡大に向けた提言
— 「南庄内・たべるを支援し隊」のケーススタディ —

淀野 駿斗

世界の中でも長寿大国と言われるこの国では、平均寿命は男女共に80歳を超えている。そしてその生活を支える要素として「食」は欠かせない。しかし、高齢期においては食をごく普通に行うことが難しくなる場合がある。

高齢期における食の支援は、従来から介護施設や医療機関等ではよく行われているが、支援を必要とする高齢者が最も長く生活する自宅においては、未だ支援の手が介入することは少なく、認知度も低いように感じている。

そこで、本研究では、高齢者の在宅における食支援の中でも南庄内地域で行われているような「地域一体型NST」の取り組みに見られる積極的な連携の取り組みに焦点をあて、調査を行った。

具体的には、「南庄内・たべるを支援し隊」の行う食支援を事例とした。事例分析は文献調査に加え、その立ち上げの構想を行った田口充氏と、同じく立ち上げから同団体に関わる管理栄養士の小川豊美氏、そして同団体の相談役や窓口としての役割を持つ鶴岡地区医師会地域医療連携室ほたるの遠藤貴恵氏にそれぞれ聞き取り調査を行い、また実際の活動にも参加してその内容をまとめた。

最後に、今後の南庄内・たべるを支援し隊の今後を見据え、また、今後同じように食に対する支援や、一部食以外の分野においても在宅患者の支援に取り組む団体の参考となるよう、(1) 病院の退院時などに、在宅でも食支援が続けられるように地域一体型NSTに支援の橋渡しをする役割を持つ、医療ソーシャルワーカーのような専門職をメンバーに取り入れる、(2) 行政の福祉政策との協働力を高め、食支援のエキスパートとしての役割を加速させる、(3) 連携のミソを把握することが必要であることを提言している。